

楽に寄せて

佐伯一麦

歌曲集「冬の旅」より春の夢（シューベルト作曲）に寄せて

春になると、歌曲　ことにリートが、親しいものに感じられるということはないだろうか。ひばりが囀りだすように、人も春の喜びを思い切り晴れやかに歌い上げたくなるというような。

前回触れた北海道への一人旅を終えて高校の教室へ戻った私は、授業中に小説を濫読したり、ときには習作を試みるようになった。高校は進学校だったが、自分は大学へは行かないと決めて、受験勉強以外の知識を得ることに励んだ。

そんなやり方に、協力してくれる教師も僅かだがいた。生物を教えていたW先生と倫理社会のN先生がそうだった。金曜日の放課後、

「金曜セミナー」と銘打って生物教室で自主講座を開いたりした。講師に頼んだ教師が、普通の授業中よりも数段生き生きとした表情で、かつて専門に学んだ学問の話をしてくれることもあり意外だった。

一面からだけ見て人を評価してはいけないことを、私はその時の経験から学ぶことが出来た。

N先生は、「作家になるには、別に大学に行く必要はないだろうが、大学にいかないと言語学にコンプレックスを持つようになってしまいう心配がある」と言い、ドイツ語を習いにいらっしやい、と声をかけてくださった。それで私は、週に一度、夕食後に自転車を飛ばしてN先生の自宅に通うことになった。

一通り簡単に文法を済ませると、N先生は専門のニーチエの原文をテキストに講義した。生きた文章を読むのが、いちばんの早道だ、と先生はしばしば口にした。

それから、私が音楽好きなのを知ると、ドイツ語の歌の歌詞を覚えることをすすめてくれた。

ドイツ語は母音の数がそんなに多くないし、フランス語や英語のように、綴りと発音が食い違うことがないので、単語を読むことは初歩の規則を覚えさえすればすぐ出来るようになる。

そうして、「Lindenbaum（菩提樹）」も

「Heidenröslein（野ばら）」も、それから第一曲目に挙げた「An die musik（楽に寄

す）」も、次々と気の済むまで歌っているうちに、単語だけでなく、ドイツ語特有の様々な言い回しもどんどん頭の中へ入っていった。

例えば、ゲーテ作詩の『野ばら』を覚えながら、「Morgenschön」という言葉と出会い、Morgen（朝）という言葉と schön（美しい）という言葉の二つをいきなりくっつけて一つにしてしまったことに驚く、といった具合に。「朝そのものの美しさ」とでも訳するのだから

うか、と思いながら、ありふれた言葉もまったく違う使い方をすることで、朝のすがすがしさのような新鮮さで息づくということを知ったのだった。

高校を出て上京した私は、やがて電気工をしながら、小説を書くようになった。

ある日、心地よい春の陽射しを浴びて、ピルの屋上の高架水槽で仕事をしていた。高いところで仕事に熱中していると、足元への注意が疎かになって、ふっと青空に吸い込まれてしまいそんな不思議な気分になることがある。そんな不思議な気分には誘われないように、私はよく歌を口ずさみながら作業をした。

『春の想い』（Frühlingsglaube）や『きけ、きけ、ひばり』（Horch, horch, die Lerch）などの歌は、その頃の私の最上の友達で、よく呼び出しては一緒に仕事をした。

シューベルトの歌曲集『冬の旅』の中の「春の夢」（Frühlingstraum）もそんな歌の

一つだった。

歌詞の意味は、花は咲き、鳥は歌う五月の野を夢みていたが、鶏の声にめざめると寒く暗い冬の朝だったという、実際は悲しい幻滅の歌である。

それは、仕事の厳しさ辛さとも重なるようだった。だが、その頃の私は、幻滅の向こうには、不動の春の夢が輝くと信じていたのだろうか。

ところでその日、高架水槽から屋上へと鉄のステップを「春の夢」を朗々と歌いながら降りた私は、次の瞬間、咄嗟に歌声を止め、赤面する羽目に陥った。

誰もいないと思っていた屋上に、人が、それも若い女性が、昼休みの陽なたぼっこをしながらやってきていたのであった。